様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：４２３１６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３５００５５

研究課題名（和文）子どもが捉えた家族･家庭生活：育てられる側からの保育環境の検討と虐待防止への示唆

研究課題名（英文）How children see their family and home life: consideration about the early childhood environment from children's points of view and suggestion to prevention of a child abuse

研究代表者
岡野　雅子（OKANO, Massako）

東京福祉大学短期大学部・こども学科・教授

研究者番号：１０１８５４５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：保育環境を整えることは重要である。本研究は育てられる側から見た保育環境について、中でも家族との関係について検討した。家族を気遣う子どもは親が一緒に遊んでくれたり話を聞いてくれる時に嬉しいと思い、家族への気遣いの弱い子どもは家庭生活の中の嬉しい場面・嬉しくない場面とも程度が低かった。母親は子どもが嬉しい場面については的を射て捉えているが、嬉しくない場面は子どもと母親の認識に相違が認められた。それゆえ、子どもにとって嬉しくない場面である「一人ぼっちの時」や「家族が喧嘩している時」の子どもの気持ちを親が想像して心を共有することの重要性が明らかとなった。それは心理的虐待を防ぐことに寄与すると考える。

研究成果の概要（英文）：　Children develop in their family life through human relations, especially interactions with family members. This study examined how children see their relations with their family members. A questionnaire survey was conducted on 329 mothers of children, and 64 five-year old children were interviewed to ask about happy and unhappy situations in their family life and the children’s concern for their families.
The results of the study indicated that the mothers knew the situations that their children considered happy but also that the mothers’ recognition of the situations that the children considered unhappy differed from the children’s recognition. The children who were concerned about their family and had a strong relationship with their family tended to feel that they were in a happy situation when their parents played with them or listened to them and in an unhappy situation when the family fought.

研究分野：保育学･児童学

キーワード：保育　保育環境　家族　家庭生活　子どもの視点　虐待防止　嬉しい場面　嬉しくない場面

１．研究開始当初の背景

筆者は学位論文において『「子どもが生きている世界」の時間と保育』の表題のもとに子どもの「時間」を切り口として様々な「時間」のなかの「子どもが生きている世界」を探った。それにより、現代における子どもが育つ環境について考察するとともに、より良い保育の実現に向けて考察を行った。近年ではしつけ方略として「早く、早く」と子どもを急かせる親が多いことは、筆者が行った調査結果から明らかとなっている。昨今の教育改革のキー・ワードの一つに『生きる力』があるが、それは子ども自身が主体的に環境と関わることと深く関係していることを考えるとき、子どもを中心軸に置いて「子どもが生きている世界」を尊重することは、すなわち、子ども自身の視点に立って子どもをとりまく環境を点検することは、重要な課題であると言えよう。

昨今の社会問題の一つに児童虐待がある。子どもに対する虐待、すなわち不適切なかかわりを行う保育者（親など）は、子どもに寄り添って「子どもが生きている世界」を理解しようとする姿勢が大きく欠落していることが指摘できるだろう。

そこで、子ども自身は自らが育つ環境である家族や家庭生活をどのように捉えているかについて明らかにすることを試みたい。そこから得られた知見は、親（保育する側）の子ども（保育される側）に対する不適切なかかわりを未然に防いで、健全な次世代を育てるという今日的課題に対して有効な示唆が得られることが期待できる。さらに、子どもの視点から保育環境を改めて点検することは、受動的で指示待ちであるといわれる今日の子どもの有り様を改善するための示唆を得ることを導き、周囲の環境（人・もの・こと）に対して子どもが主体的に働きかけ、かかわろうとする主体性の育成につながると考える。

２．研究の目的

次世代をになう人材である「子ども」を健全に育てることは、先行する世代の我々にとって基本的に重要な課題である。幼児期の保育は環境を通して行うものである（『幼稚園教育要領』の冒頭の文章）ことから、保育環境をいかに整えるかは保育にとって最も重要な問題である。また、子どもを取り巻く保育環境の中で、家族は極めて重要な環境であり、幼児期の発達は「家庭生活」の場において「家族」という人間関係の中で、幼児と家族員との相互作用の基に行われている。

保育環境についての検討は、従来から保育する側の観点からされており、その研究の蓄積は多い。しかし、保育する側から見た望ましい保育環境は、育てられる側から見たときに、果たして適切なものであるのだろうか。

本研究は、育てられる側の視点に立った保育環境について、中でも人的環境として重要な家族についての検討を試みる。

子どもと家族とのかかわりの有り様を把握する手がかりとして、本研究では家庭生活の中の「嬉しい場面」および「嬉しくない場面」を取り上げるとともに、家族との心のつながりの有り様として「家族への気づかい」に着目することにした。そこから得られた知見を基にして、今日の社会的課題である子育ち・子育てに対する支援のための、より良い保育環境について考察したい。さらに、児童虐待の一つである心理的虐待の予防に対する示唆を得ることを目的とする。

３．研究の方法

(1) 予備調査：

大学生を対象に質問紙調査を行った。質問項目は、家族や家庭生活の中の「嬉しかった場面」「子ども心に嫌だった場面」、「大人(育てる側)と子ども(育てられる側)の間に気持ちのズレを感じましたか？」「大人と子どもの気持ちのズレが生まれるのはなぜだと思いますか？」であり、275 名から回答を得た。調査時期は 2013 年 11 月であった。

(2) 幼児の母親に対する調査：

北関東の地方都市にある幼稚園・保育所（各１園）に通園(所)している幼児の母親を対象に、質問紙調査を行った。質問項目は、「わが子の家庭生活の中の嬉しい場面」「嬉しくない場面」（予備調査結果の上位項目）、「わが子の家族への気づかい」等であり、329 名から回答を得た。調査時期は 2014 年 7 月であった。

(3) 幼児に対する調査：

上記(2)の幼稚園・保育所の年長組児であり(2)で回答した母親の子どもを対象に、面接調査を行った。質問項目は、「家族とのかかわりの中の嬉しい場面」「嬉しくない場面」のイラスト画各 5 場面を提示して、それぞれの場面についてどのくらい嬉しいか(嬉しくないか)、一番嬉しい場面(一番嬉しくない場面)はどれか、家族への気づかい場面（イラスト画 4 場面を提示）についてどのくらい気づかうかについてであり、64 名から回答を得た。調査時期は 2014 年 11 月であった。

４．研究成果

(1) 家庭生活の中でわが子が嬉しいと母親が捉えている場面は、「一緒に遊んでくれた時」「褒められた時」が多く 8～9 割の母親が回答した。「話をよく聞いてくれた時」「何かを買ってくれた時」「皆でおいしいものを食べた時」「自分のことを心配してくれた時」と続く（複数回答）。この結果を予備調査結果と比較すると、上位 2 項目の「褒められた時」「遊んでくれた時」は同じである。

わが子の家族への気づかい場面として 4 つを提示し 5 件法で回答を求めた結果，いずれの場面も「その通り」「ややそうである」の肯定回答が過半数を占めた。4 項目について主成分分析を行ったところ 1 因子のみが抽出

された。α係数は 0.70 であり加算尺度として使用して差し支えないと判断し加算して「家族への気づかい」得点とした。さらに得点により 3 群に分け、高得点群（n=94）、中得点群（n=149）、低得点群（n=84)とした。

嬉しい場面と家族への気づかい得点との関連を見ると、「家族への気づかい」低得点群は「何かを買ってくれた時」の割合が高い傾向にあるが統計的有意差には至っていない(Pearson のカイ 2 乗検定、χ^2=5.63, df=2,p<0.1)。その他の場面については 3 群間に差は認められなかった。嬉しくない場面と家族への気づかい得点との関連を見ると、「家族への気づかい」低得点群で「話をよく聞いてくれない時」の割合が低く（χ^2=7.78, df=2, p<0.05）、高得点群で「家族が喧嘩している時」の割合が高かった（χ^2=8.29, df=2, p<0.05）。

これらの結果から、わが子は気づかいができると思っている母親は家族が喧嘩している時や話をよく聞かない時にわが子は嬉しくないと捉えていることがわかる。

(2) 子どもとの面接調査から、家庭生活の中の嬉しい場面に対して「大変嬉しい」の回答は、「欲しいものを買ってくれた時」が 8 割と多く、「遊んでくれた時」「褒められた時」「話を聞いてくれた時」の順であった。

5 つの場面の中で「一番嬉しい場面」を一つ選ぶよう求めたところ、「欲しいものを買ってくれた時」が過半数を占めた。

家庭生活の中の嬉しくない場面に対して「すごく嫌」の回答は、「叱られた時」が過半数で、「一人ぼっちの時」「家族が喧嘩している時」「話を聞いてくれない時」の順であった。

5 つの場面の中で「一番嬉しくない場面」を一つ選ぶよう求めたところ、「一人ぼっちの時」が 3 割を占め最多であった。

「家族への気づかい」の 4 場面の中で、「家族（父親や母親）が忙しい時」は 47%の子どもが「直ぐにお手伝いしたい」と回答した。一方、「家族（父親や母親）が疲れている時」に「いっぱい気になる」と回答した子どもは 11%にすぎず「気にならない」の回答が 39%であった。

家族への気づかい 4 項目の得点を合計して「気づかい得点」とし, 得点により 3 群に分け、高得点群（n=15）、中得点群（n=36）、低得点群（n=13)とした。

嬉しい場面と家族への気づかい得点との関連について各群の平均得点で見ると、「家族への気づかい」低得点群は 5 つの場面とも高得点群・中得点群と比べて嬉しい程度が低く、中でも「遊んでくれた時」（一元配置分散分析, F=12.82, df=2, p<0.01)、「話を聞いてくれた時」(F=5.71, df=2, p<0.05)は嬉しい程度得点は有意に低かった。したがって、家族への気づかいが少ない子どもは遊んでくれた時、話を聞いてくれた時の嬉しい程度は弱いことが分かる。

嬉しくない場面との関連を見ると、「家族への気づかい」低得点群は 5 つの場面とも高得点群・中得点群と比べて嬉しくない程度は概して低い。中でも「家族が喧嘩している時」は「家族への気づかい」得点が高い群ほど嬉しくない程度得点が高い傾向にあるが統計的有意差には至っていない(F=2.75, df=2, p<0.1)。

「家族への気づかい」得点と「嬉しい場面」の嬉しい程度得点、「嬉しくない場面」の嬉しくない程度得点の関連を相関係数でみると、「遊んでくれた時」「話を聞いてくれた時」の相関係数には有意差が認められた（r=0.32, p<0.01, r=0.33, p<0.01）。したがって，家族への気づかい得点が高い子どもほど「遊んでくれた時」「話を聞いてくれた時」を嬉しいと思っていることが分かる。一方、嬉しくない場面については、「家族が喧嘩している時」に相関係数に有意差が認められた（r=0.27, p<0.05）。したがって，家族への気づかい得点が高い子どもほど「家族が喧嘩している時」を嬉しくないと思っていることが分かる。

(3) 面接調査対象児の 64 人とその母親をペアにして両者の関係について見ると、以下の通りであった。

「嬉しい場面」「嬉しくない場面」に対する回答方法は母親は複数回答で子どもは嬉しい・嬉しくない程度を 4 段階で回答する単数回答であるので，各場面について母親の「回答あり」「回答なし」の 2 群により子どもの回答を比較すると、「嬉しい場面」については「話を聞いてくれた時」にのみ母子ペア間に関連が認められ（χ^2=9.75, df=3, p<0.05)、「嬉しくない場面」については母子間に関連は認められなかった。したがって，「話を聞いてくれると嬉しい」は母子間の認識が一致しているといえる。

「家族への気づかい」については「家族の具合が悪い時」にのみ母子間に相関が認められた（r=.301,p<0.05）。

(4) 学生による回顧的方法により，大人と子ども（自分）の間に気持ちのズレを感じていた者（「強く感じた」「少し感じた」）は過半数（58.1%）を占め, ズレを感じなかった者(「あまり感じない」「まったく感じない」)は僅か 1 割にすぎないことが明らかになった。その理由は、大人の子どもへの配慮が子どもにはまだ分からないからが多いものの、大人は自分の価値観で決めてしまう、大人は自分の気分で子どもに応じる、子どもを一人前の人間とみていない、親の果たせなかった夢を子に託す、親の見栄、子どもはモノを与えれば喜ぶと単純に思っている、親のストレスを子どもにぶつける、などであった。このことは、親が子どもの意思を尊重せずに自分の都合を優先している姿に接した時に、子どもは大人との気持ちのズレを感じると言えるだろう。

「嬉しい場面」についての学生群の回答と

母親群の回答を比べると，上位 2 場面は「褒められた時」「遊んでくれた時」で同じである。子ども群の回答でもこの 2 場面は「大変嬉しい」が 7〜6 割を占めている。したがって、子どもが嬉しいと思う場面については育てる側（母親）は的を射て捉えていると言えるだろう。なお、「欲しいものを買ってくれた時」は、子ども群で 8 割が「たいへん嬉しい」と回答し、過半数の子どもが「一番嬉しい場面」と回答していて、学生群（17%）や母親群（36%）と比較するとたいへん高率である。この結果は、大学生になって幼児期を振り返った際には幼児の回答ほどには嬉しい場面として認識していないことから、具体的なモノが手に入る場面を嬉しいと捉えることは幼児期の子どもの特徴であると言えるのではなかろうか。

「嬉しくない場面」について学生群は「自分の意思に反して○○をさせられた時」が最多（28%）であるが、母親群では 6 位（15%）にすぎない。子ども群は「たいへん嫌」の回答は「叱られた時」（52%）「一人ぼっちの時」（44%）「家族が喧嘩している時」（38%）が高く、「一番嬉しくない場面」は「一人ぼっちの時」（30%）が最多で「家族が喧嘩している時」（25%）「叱られた時」（22%）と続く。母親群は「叱られた時」（82%）と「話を聞いてくれない時」（57%）の回答が多い。これらの結果から，学生群、母親群、子ども群の間に違いが認められた。したがって、子どもにとって嬉しくない場面については、子どもの認識と母親の認識の間に違いがあることが示唆される。このことは、学生群で親との気持ちのズレを感じたと回答する者が過半数を占めていることと符号するのではないだろうか。

(5) 家族への気づかいについて，母親群は子ども群に比べて肯定回答の割合が高かった。すなわち，子ども自身による家族を気づかっていると認識している程度以上に母親はわが子は家族を気づかってくれていると認識している。また、母子をペアにしてみたところ、気づかいの４場面のうち「家族の具合が悪い時」にのみに母子間の相関が認められた。したがって、家族への気づかいに対する母親の認識は子どもの認識以上に高く、具合が悪い時に子どもが表す気づかいは母子ともに認知度が高いといえる。

母親回答からは、わが子は気づかいができないと思っている母親の場合には、話をよく聞いてくれない時や家族が喧嘩している時にわが子は嬉しくない程度は低いと捉えていた。

子ども回答からは，家族を気づかうことができる子どもは親が一緒に遊んでくれたり話を聞いてくれた時に嬉しいと思っていた。このことは、「話をよく聞いてくれない時」にわが子は嬉しくないと捉えている母親はわが子は家族への気づかいが強いと認識しているという結果と一致していることがわかる。

家族への気づかいは家族とのかかわりや心のつながりの有り様の表れであると考えると、これらの結果から、家族との心のつながりの有り様によって、家族や家庭生活に対する子どもの捉え方は異なっていると言えるのではないだろうか。すなわち、家族との心のつながりが強い場合には子どもは家族を気づかい、親が一緒に遊んでくれたり話を聞いてくれた時に嬉しいと思うということを表していると考えられる。

(6) 家族への気づかいの弱い子どもは，家庭生活の中の嬉しい場面の嬉しい程度も嬉しくない場面の嬉しくない程度も概して低いことが明らかとなった。

また、嬉しい場面については、母親は的を射て捉えていて子どもとのズレは少ないが、嬉しくない場面については、そうではないことが明らかとなった。

先行研究からは，子どもの愛着の安定性には夫婦関係の調和性と親役割からのストレスが関係していること（数井他, 1996）、夫婦関係の良さが親の養育行動や家族機能状態を媒介して間接的に子どもの発達に影響を与えるとともに、夫婦間葛藤にさらされることが直接的に子どもの発達やメンタルヘルスに影響を与えること（Cummings, Davis, & Campbell, 2000）、さらに、両親間の愛情の強固さと家族機能の良好さは関連し、家族機能の良好さと児童期の子どもの抑うつ傾向が関連すること（菅原他, 2002）などの知見が得られている。また、川島（2005）は中学生を対象に研究を行い、子どもの夫婦間葛藤認知と家族機能評価の関連は性別により異なり、女子は母親の夫婦間葛藤認知をもとに両親の夫婦関係を評価し、それが本人の家族機能評価に関連している可能性を示している。しかし、青年期になると、両親からの一方的な影響というよりも自分自身の主体的評価が親や家族イメージおよび子どものメンタルヘルスに影響を及ぼしていると若原（2003）は指摘している。

本研究結果からは、家族への気づかいができ、家族とのかかわりが強いと母親が捉えている子どもの場合には、親が一緒に遊んだり話をよく聞くなどの心を共有する場面を子どもは嬉しいと思うと母親は捉えていた。

したがって，一番嬉しくない場面である「一人ぼっちの時」の子どもの心細さや,「家族が喧嘩している時」の子どものやるせない気持ちに対して，育てる側が想いを馳せることが重要であると考える。すなわち、育てる側は子ども自身が生きている世界について想像して、子どもの心の状態を適切に感じ取ることの重要性が明らかとなったと言えよう。言い換えるならば、嬉しくない場面について、子どもの心に寄り添うことが必要である。本研究の結果からは、嬉しい場面につい

ては子どもの心に寄り添うことが比較的容易にできるが、嬉しくない場面については困難であることが示唆された。子どもは自分の心情を客観化して十分に言葉で他者に表現することは難しい。それゆえ、育てる側が嬉しくない場面について子どもの心情を洞察して寄り添うよう努力することが望まれる。それは，心理的虐待を防ぐことに向けて保育環境を整えることに寄与すると思われる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

岡野 雅子、子どもは家族とのかかわりをどのように捉えているか？－母親の捉えとのズレに着目して－、日本家政学会誌、査読有、Vol.68 No.2、2017 年 2 月、pp.49－59.

〔学会発表〕（計５ 件）

① OKANO, Masako、How Do Japanese Children View Their Relationship with Their Family? 23th IFHE World Congress 2016「Daejeon Convention Center, Daejeon, (Korea)」、2016 年 8 月 2 日.

② 岡野 雅子、子どもが捉えた家族･家庭生活（第 3 報）－幼児面接調査から－、日本保育学会第 69 回大会「東京学芸大学（東京都･小金井市)」、2016 年 5 月 8 日.

③ OKANO, Masako、Mothers’ Perception of Mother-child Relationship in Japanese Families、The 18th ARAHE Biennial International Congress 2015「The Hong Kong Institute of Education, Hong Kong, (Hong Kong)」、2015 年 8 月 4 日.

④ 岡野 雅子、子どもが捉えた家族･家庭生活（第 2 報）－保護者対象調査から－、日本保育学会第 68 回大会「椙山女学園大学（愛知県･名古屋市)」、2015 年 5 月 9 日.

⑤ 岡野 雅子、子どもが捉えた家族･家庭生活－大学生の自己分析資料による考察－、日本保育学会第 67 回大会「大阪総合保育大学（大阪府・大阪市)」、2014 年 5 月 17 日.

６．研究組織

(1)研究代表者

岡野 雅子（OKANO, Masako）
東京福祉大学短期大学部・こども学科・教授
研究者番号：１０１８５４５７